

微小害虫の自動識別を利用した発生予察の可能性

中野昭雄（徳島県農総セ）・寺田賢治（徳島大工）・○三浦一芸（近中四・広大）

近年の技術開発によってIPMの実践が各地で普及しつつあるが、効果的に利用できる生産者はわずかである。その一因は生産者が病虫害、特に微小害虫の発生状況を的確に把握できないからである。一方、微小害虫の発生状況は黄色等の粘着トラップで把握するが、捕獲した様々な昆虫の中から微小害虫を見分け、計数することは見慣れた者でさえも相当な時間を費やしている。そこで私たちは、安定した農業生産と環境への負荷低減を実現するIPMの実践を支援するため、微小害虫の発生状況をIT機器と画像解析ソフトウェアを利用することで生産者等の誰もが速く、正確に把握できるシステムを開発してきた。具体的には粘着トラップで捕獲した様々な昆虫の中からハモグリバエ類、アザミウマ類およびコナジラミ類等を高率に識別・計数する画像解析プログラムを開発してきている。本講演ではこの自動的に害虫識別しカウントし農家に防除適期を知らせる装置について紹介する。これにより将来全自動化（ロボット化）する際の目の部分の基礎ができた。

